

「タムール・シェルパ」その後 —東部ネパール・タムール川流域の調査より—

今井一郎

関西学院大学総合政策学部

1 はじめに

「サーブ、私たちが11月1日ここ（スケタール）に着いた時『ポーター（荷物運び）に雇ってくれ』と言ってきた男がカトマンズに護送されるそうですよ。」

「え、どうしてだ？何か事件でも起こしたのかい？」ガイドのR君に聞かされて、私は驚いた。11月26日にグンサ谷の調査からスケタールに戻ったばかりの時のことだ。

「あの男は他の会社のトレッキング・パーティのポーターになってグンサ村にも来ていましたが、サーダー（トレッキング・コンダクター）と何かトラブルがあったようです。

先日ここに戻ってきてから、酒を飲んでサーダーを殴り、ポリスに突き出されたそうです。彼をカトマンズまで送る件で、今ポリスが電話で打ち合わせていました。」

「そんな乱暴な男を雇わなくてよかったね。」

私はR君に相づちを打ったが、ガイド、ポーターそしてコックなど、多くの人びとを雇用して出かけるヒマラヤ登山・トレッキングには、この種のトラブルが突発的に起こることが避けられないのかもしれない、と感じた。このカンチェンジュンガ山麓に暮らす人びとの間にも、観光業の占める割合が高まってきた、という印象を受けたのである。

以前は、ヒマラヤ地域の高峰を目指す登山記録を読んでいると、マネージャーがポーターたちと賃金の値上げをめぐる交渉する場面が、よく登場した。このタムール川流域でも、登山隊の荷を運ぶポーターたちが賃上げを要求して交渉する場面を描いた記録が残されている（上田、1979）。ポーターたちは、賃上げ交渉をする前に決まって荷物を放り出し、ストライキをするのだ。現在では、一般観光客のトレッキングにおいては、特別な場合を除き使用人の賃金交渉に多くの時間を費

やさなくともよい。地域、ルートおよび職種（ガイド、ポーター、コックなど）によって日給が決まっており、代理店のスタッフに任せておけばよいからである。賃金の支払いはいナイケ（人夫頭）またはサーダーが各々のポーターに適正な重さの荷物を配分しておけば、旅行中の荷物輸送に関して問題が起こることは滅多にない。私自身の約20年間にわたるネパール・ヒマラヤ地域での旅行経験でも、雇用に関する大きな問題は起きなかったので、これまではあまり深く考えたことはなかった。

しかし、今回タムール川流域を旅してみると、ポーターの雇用、賃金などについて考えさせられる場面に何度も遭遇した。その中から、いくつか述べてみよう。

グンサ村までのポーター探し

11月1日に私たちがタプレジュン空港（スケタール）に降り立つ前日、R君はインド国境の町ピラトナガルから、スケタール在住のポーター手配師であるK氏に電話をかけて、ポーターの手配を頼んだ。翌日スケタールで、K氏から話を聞いて私たちの前に現われた人びとには、何故か私たちが伝えた条件が正確に伝わっていなかった。私は、区間はグンサまでの片道、日給150ルピーという条件を出していたのだが、集まった男たちはスケタールからグンサまでの往復、日給は200ルピーという条件を主張して譲らなかった（1ネパール・ルピーは約2円に当る）。私は、グンサ村より上流域で何日か滞在して調査する予定だったから、その間ポーターを雇う必要がなかった。彼らと直接交渉にあたったR君は彼らの要求を拒否し続けたが、彼らには私たちの行動予定がなかなか理解してもらえなかった。やや気色ばんだ面持ちの者もいた。その中に、後にサーダーを殴って捕まった男もいたのだ。

「あの時彼奴は私に殴り掛ってくるかと思いましたが。」

後からR君は笑っていた。結局、私たちは別の人から若者を2人紹介されて雇い、無事にグンサ村まで辿り着いた。彼らは、十代後半の愉快的連中だった。

ポーターを片道で雇う場合には、帰路の賃金として何日分か支払うことになっている。グンサからスケタルまでは帰路2日分である。グンサまでの6日と帰路の2日分の給料に、私が僅かな額のチップを上乗せして渡すと、彼らは「今日はアムジラッサまで降りるんだ」と言いながら、満面に笑みを浮かべて立ち去って行った。

スケタルまでのポーター探し

グンサ村からの帰り道も、私たちはポーターの調達について思案した。R君によれば、グンサ村の住民をポーターとして雇うと割高だ、というのである。村人は、通常200ルピー以上の日給を要求する、というのだ。スケタルでなら150ルピーで雇うことができる。タプレジュンの周辺では、低地から高地に物資を運ぶポーターが職業として定着しており、ポーター業に従事する若者が増えている、というが、グンサ谷の人びとは恒常的にポーター職に就いているわけではない。私が前稿(1996)で報告した通り、グンサ谷の人びとの生計は、農耕、牧畜、カーペット製作、チベットとの交易および高所での物資輸送による収入によって成り立っている、近年は、旅行者向けにロッジを経営する者ができた。人びとを、それらの仕事から引き離して雇うためには、より高い給料を払わざるを得ない、という訳である。

その時はR君が気を利かせ、丁度グンサ村に到着した別のトレッキング・パーティから2名のポーターを譲り受けることができた。そのパーティは人数が多く、グンサに到着するまでに食料や燃料(灯油)の量が減ったので、ポーターの数を減らそうとしていたのである。グンサで解雇される予定だったポーターの方でも、帰路の手当として2日分の給料だけ受け取ってスケタルまで戻るよりは、私たちのパーティに再び雇われて、働いた日数分の給料が手に入る方が得だ、と判断したのであろう。

以上、今回の調査で印象に残ったポーターに関

するエピソードを綴ってみたが、この地域には、ヒマラヤ登山やトレッキング・パーティとは直接関わらず、カンチェンジュンガ周辺村落への物資運搬に携わるポーターが増加しつつあることも、指摘しておかねばならない。

近年は、グンサ谷の各村に設けられたパッティ(飲食店)やロッジが注文した食料品、雑貨など生活物資の大部分が、タプレジュンを経由してタムール川上流域まで運搬されているのである。近年、ピラトナガルからタプレジュン・スケタルまで、ヒレ、バサンプールを経由する自動車道路とイラムを経由する自動車道路が建設中であり、完成まで僅かな区間を残すのみである。また、後述するように、1997年にグンサ谷の上部はWWFの主導によって自然保護地域に指定された。それに連動してグンサ村より上流域はネパールの国立公園になった。今後は、今まで以上に外国人観光客が入域してくるだろうから、この地域への人と物資の流入が一層増えることになるだろう。それに伴って、地域住民の生活戦略が変容していくであろうことは、想像に難くないのである。

私は、1998年10月下旬から11月下旬にかけて、東部ネパール・タムール川流域とグンサ谷上部で、住民生活と自然環境との関わりについて現地へ赴いて調査してきた(図1)。1995年11月の調査に続く2回目の調査である(今回の調査は、文部省科研費・国際学術研究・代表者:京都大学教授・辻本雅史による)。行動の概要については別稿(1999)に記したので、本稿では、1995年の調査結果の不備な点を補いつつ、グンサ谷地域の国立公園化が住民生活と自然環境にもたらす影響と、住民の民族性(jhat)について考察を進めたい。

2 グンサ谷の現状

a) 調査方法と内容

前述の通り、私は1998年10月31日から11月27日まで、極東ネパール・タムール川流域を訪問した。タプレジュン空港(スケタル)からタムール川上流域、標高約4,650メートルの地点にあるロナークに至る行程の各所で、自然環境と住民生活の現状についての情報収集に努めた。また、ロナークより高所は、地域住民が家畜の放牧基地として利用する最高地点に近いパンペマ(標高約



図1 タムール川流域

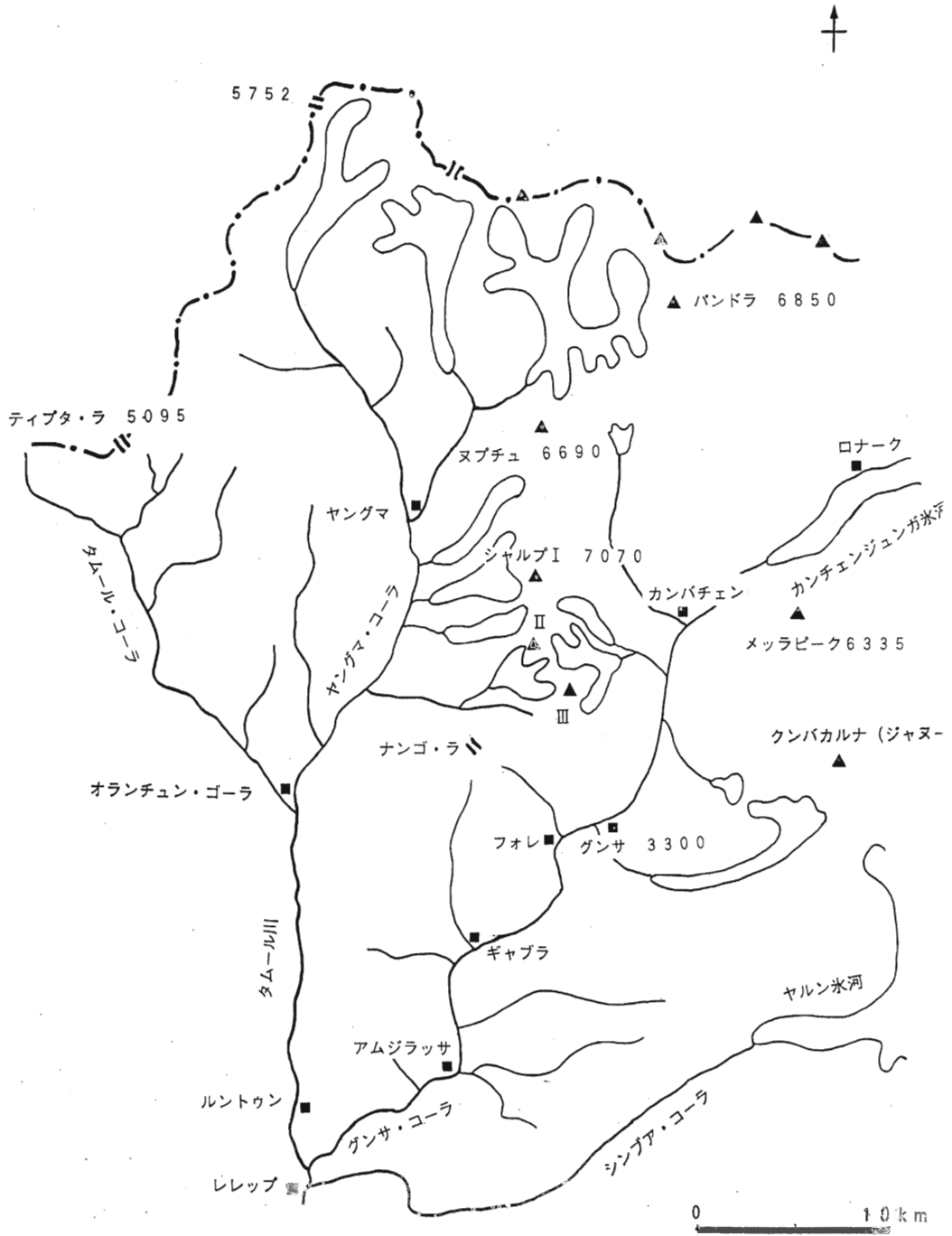


図2 タムール川流域上部

5,100メートル)まで足を伸ばした。中でも、カンパチェン(標高約4,100メートル)とロナークの両集落で、そこに暮らしていた全ての世帯を訪問し、世帯員から家族構成、両親の出生地、夫と妻のタール(クラン)名および生業内容について話を伺った。前回の調査(1995年)では、調査対象村落をグンサ村までに限ったので、今回は、対象をグンサ村より上流域で暮らす人びとにまで広げたのである。

質問項目は、前回グンサ村を中心に進めた調査で用いたものと同じである。また、この地域は1997年にネパール政府から国立公園に指定されたので、人びとから、指定後の自然と住民生活の変化および問題点などについても語ってもらった。

聞き取り調査の結果は、1995年の調査結果(今井、1996)に追加して、表1から表4に示した。なお、人びとからの聞き取りにあたっては、前述のガイドR君の助力を得た。

b) 生活の概要と変遷

この地域には、これまで登山隊や学術調査隊を除き外国人の立ち入りが禁止されていたので、地域住民の生活・文化に関する明確な情報が乏しく、僅かな文献記録が残されるのみである。その中で、1950年代にこの地を訪れたフューラー・ハイメンドルフ(1975)とピスタ(1967)によれば、地域住民は下流域の人びとからポテ、ポティア(チベット人)と呼ばれ、山間部でヤクを中心にした牧畜活動と農耕を営んでいた。また、タムール川上流に位置するオランチュン・ゴーラは、チベットとの交易における重要な中継村落として記述されている。グンサ・コーラ流域に点在する諸集落(グンサ、アムジラッサ、セカトムなど)は、すべてここから派生した、とされる(Hürer-Haimendorf、前掲)。オランチュン・ゴーラ方面は、現在でもトレッキング・ルートに指定されており、外国人観光客の入域が困難である。この地域は、歴史的にシッキム王国とのつながりが深く、カトマンズに本拠を置くネパール中央政府から、政治的に辺境視されていた経緯があるため、と考えられる。

グンサ村における住民生活の概要については、既に前稿(1996)に述べた。前述の通り、1998年の調査ではグンサ村より上部に位置する集落(カ

ンパチェン、ロナーク)で資料を得たが、これらの集落はいずれも通年的な常住村ではなく、グンサ村の住民やフォレ村のチベット人が農耕や牧畜活動のため季節的に利用するだけ、とのことである。したがって、私がそこで会って話を聞いた人びとの出自と暮らしの内容は、1995年の調査で聞いた内容と大差無かった(表1,2)。

近年になって、住民を取り巻く社会的状況に変化が起こった。カンチェンジュンガ地域の自然環境を保護し、社会環境を改善する動きが具体化し始めたのである(たとえばBrown1994, Gurung1996, Uprety1994など)。WWF(世界自然保護基金)のネパール支部は、この地域に生息する動植物の保護に乗り出し、1997年にカンチェンジュンガ地域を自然保全地域(Nature Conservation Area)に指定した(渡辺、1998)。すなわち、地域住民も含めてカンチェンジュンガ地域の環境管理を図るプロジェクトを開始したのである。それに伴って、ネパール政府はこの地域を国立公園に指定した。観光客の誘致による外貨獲得への期待が大きいことは言うまでもない。カトマンズに本拠を置く各旅行代理店も、今まで以上にカンチェンジュンガ地域へトレッキング・ツアー客を送り込む体制に入り、入域者数も近年増える傾向にある(渡辺、1998;1-2)。

これら一連の動きは、必然的に外部からの資金と観光客数が増加する動きになって現われ、地域の自然環境だけでなく、住民生活にも大きな変化をもたらすことになる、と思われる。以前私は、青森県・鯉ヶ沢町・旧赤石村地区で行なった調査を念頭に置きながら、1979年に国連・ユネスコから世界遺産に指定されたネパール・クンプ地方の実状を分析した。その結果、地域が国立公園化され、世界遺産(自然遺産)に登録されたことにより、地域の自然環境と文化に根ざした生業システムが産業社会のシステム(市場経済)にシフトし、その結果深刻な環境問題に直面している、と指摘した(今井、1990、1993)。クンプ地方では、観光客と宿泊施設の増加に伴って環境汚染が深刻化した。地域住民の多くは、現金収入を得るために観光産業に関係した仕事(ガイド、ポーター、ロッジや土産物屋の経営など)に従事せざるを得なくなり、その結果自然環境(森林など)の破壊が急速に進んだ。人びとの生業は、農耕・牧畜・商

表1 グンサの各家庭の生計

	農耕	牧畜	観光	交易	カーベット	その他
1	○	○	—	—	—	—
2	○	○	—	—	○	—
3	○	○	—	—	○	—
4	○	—	—	—	—	—
5	○	○	—	—	○	—
6	○	—	—	—	○	—
7	—	—	—	—	○	—
8	—	—	—	—	○	—
9	○	○	○	—	—	—
10	○	○	○	○	—	—
11	○	○	—	—	—	—
12	○	○	—	○	○	—
13	?	?	?	?	?	?
14	○	○	—	—	○	—
15	○	○	○	—	○	—
16	○	○	—	—	○	—
17	○	○	—	○	○	—
18	○	○	—	—	○	—
19	○	○	○	—	○	—
20	○	○	—	—	○	—
21	○	○	○	—	○	—
22	○	○	○	○	○	—
23	○	○	○	○	○	—
24	○	○	—	—	—	○:ラマ
25	○	○	—	○	—	—
26	○	○	—	—	○	—
27	○	○	—	○	○	—
28	○	○	—	—	○	—
29	○	○	—	—	—	—
30	○	○	○	—	○	—
31	○	○	○	○	○	○:ラマ
	数字は表1	の家庭番号	と共通			
	○:有	—:無				

表2 各家庭の生計 (カンバチェン、ロナーク、ラムタン)

カンバチェン	農耕	牧畜	観光	交易	カーベット	その他
1	○	○	○	○	—	—
2	○	○	○	—	—	—
3	○	○	○	○	○	—
4	○	○	○	○	○	—
5	○	○	○	○	○	—
6	○	○	○	—	—	—
7	○	○	—	○	○	—
8	○	○	○	—	○	○:ラマ
ロナーク						
1	—	—	○	—	—	—
2	—	○	○	○	—	—
3	○	○	○	—	—	—
ラムタン						
1	—	—	○	—	—	—

業活動(チベット交易)の組み合わせから、観光業(トレッキングのガイド、ポーターやロッジ経営など)が中心になりつつある(月原、1990; 85-112など)。都市部で高等教育を受けたり観光産業に従事するため、若年層を中心にした村外流出が進行し、地域には過疎と高齢化がもたらされた。クンプ地方の人びとは、地域の自然・文化と密着した生活から次第に離れつつある。

さらに、クンプ地方の自然は深刻な環境問題にも曝されている。多くの観光客(トレッカー)が山間の限られた細い道を歩き回ることにより、一帯の地形・植生は破壊され、人びとの通行に支障が生じている。大量のゴミや汚物も放置されたままである、また、観光客やガイド・ポーターたちの食事を調理するために、周辺の山林から薪の伐採が進み、森林が広範囲にわたって消滅した。

ネパール政府は、WWFの動きを受けて、カンチェンジュンガ地域を国家の観光資源として位置付け、WWFから自然保全地域に指定されたのと同じくして、国立公園に指定したのである。このまま進めば、この地域は約20年前にクンプ地方で進んだのと同じような事態に曝される恐れがあるのではあるまいか? 地域の近代化にともなう社会の変質と環境問題の顕在化にどう対処すべきかという課題には、多くの研究機関や研究者たちが取り組んでいる。カンチェンジュンガ地域においても、1997年から北海道大学・地球環境科学研究所の渡辺倜二博士らによる調査研究が始められた(渡辺、1998、1999など)。

c) 住民生活の現状

本節では、1998年に行なった現地調査の際に地域住民から聞き取った話を、国立公園設立による影響と住民の民族性といった点から整理していきたい。

◇国立公園化による影響

1 多くの住民は、地域が国立公園に指定されたことは知っているが、国立公園についてよく理解していない。1998年、グンサ村にKCAP(Kanchenjunga Conservation Area Project)のオフィスが設置されたが、その業務内容を理解している人はごく一部に限られる。ここは、国立公園への入園者(トレッカー)から入園料を徴収する他、地域住民も含めて人びとに環境保

- 全意識を啓発する役割も担っている。
- 2 多くの住民は、地域が国立公園に指定されたことにより、家屋の建築や調理に用いる薪材の採取が禁止されるのではないかと、という不安を抱いている。私がオフィスで確認したところ、住民が申請すれば伐採は認められる、とのことであった
 - 3 地域への入域者数は増加した。それに伴って、依田ら（1999；16）が指摘するように、外部者を受け入れる施設（ロッジ、パッティなど）の建設が活発になった。住民からの聞き取りによれば、ロッジなどの建設費用に対しては低利の融資が利用できる、とのことであるが、詳細は聞き漏らした。
 - 4 地域の若年層の中には、都市への出稼ぎや留学のために長期にわたって村を離れる者が増加している。グンサ谷での調査の中では、カトマンズやタブレジュンなどへ転出する若者が何人か見受けられた。住民はこれまで、ソル・クンプ地方のシェルパ語とは若干異なるチベット方言を用いてきたが、今後この地域に外国人観光客を受け入れるためには欧米語の使用が必要になる、という認識の表れではあるまいか？
 - 5 依田ら（1999；19）によれば、宿泊施設の増加に伴ってヤクの放牧に従事する世帯数が減り、その一方でチベット交易に力を入れて外部から物資を調達する動きが活発になってきた。

3 住民の民族性について

前回訪れた時（1995年）の調査報告書（1996）で述べた通り、住民は約200年前にこの地域に移住してきた、と言われるが、近年まで外部社会の人びとからボテ、ボティアという一種の蔑称で呼ばれており、シェルパという名称は用いていなかった。しかし、過去20～30年の間にグンサ谷およびヤングマの住民はシェルパを自称するようになったのである。タムール川流域にはオランチュン・ゴーラ出身のロッジ経営者が何人かいるが、彼らもまたシェルパを自称していた。

グンサ村でレップ村出身の女性から聞いたところによれば、タムール川右岸に位置するレップ村には、数世代程前にソル・クンプ地方からシェルパの人びとが移り住んできた、とのこと、住民はシェルパを自称している。彼らは主として

農耕に従事しており、牧畜活動への依存度はさほど高くない。また、タムール川本流域およびヤンポディン周辺とともに、アライチ（未同定）という香辛料用草本植物の栽培がさかんである、という。チベットとの交易活動は見られず、チベタン・カーペットの製作も行われていない。さらに、トレッキング産業との関わりも全くない。これまでの聞き取り調査においては、タムール川右岸の諸集落の住民とグンサ谷やヤングマ谷の住民との交流はほとんど聞かれなかった。

私は、これまでの調査を通じて、1959年に起きたチベット動乱に関わる動きが、住民が名乗る民族名（ジャート）に大きな影響を与えたのではないかと考えている。チベット動乱後、ダライ・ラマをはじめ多くの人びとがチベットから流れ込み、ネパール国内の各所にチベット人たちを収容する難民キャンプに収容された。グンサ村の冬村であったフォレにもチベット人の難民キャンプが作られ、その結果グンサ村を取り巻く状況が大きく変化した、と思われるのである。グンサ村の住民は毎年冬期間（12～3月）はフォレで暮らしていたので、難民キャンプで暮らすチベット人とも交流が深まったであろう。在来の住民とチベット難民は、生活様式、言語などの文化的要素を共有しており、両者の間での通婚は頻繁に起こるようになった（表3, 4）。彼らの社会においては、ネパール国内の他の民族社会の婚姻と同じく、夫と妻のタール（クラン）が問題にされる。彼らの社会は父系出自に基づいた外婚的クランから成り立っており、グンサ村住民のクラン名については既に前稿（前掲）で記載した。グンサ住民のクラン名は、ソル・クンプ地域に居住するシェルパのクラン名と共通するものもあるが、多くの名称は異なることがわかった。

グンサ谷住民の伝承によれば、彼らの先祖はオランチュン・ゴーラを経由して入ってきたチベット人であるが、独自のタール（クラン）名を持ち、同じ村あるいはオランチュン・ゴーラの住民同士でクラン外婚を続けていた。付近に居住するライ、リンブーといった異なる民族との間の婚姻も、少数ながらあった。フォレのチベット人との婚姻の場合には、ネパールに移入してきた経路が異なるために、タール（クラン）名も異なり、文化的には同じでも相互に異民族として接する必要がある

表3 グンサの各家庭における夫婦の出生地とthar(クラン)名

家庭	夫婦の出生地	thar名	備考
1	夫: グンサ 妻: グンサ	chorzomba balbao	父はオランチュン・ゴーラ 祖父はチベット
2	夫: グンサ 妻: 不明	chorzomba チベット人	
3	夫: グンサ 妻: グンサ	balbao chorzomba	父、祖父ともにグンサ
4	夫: グンサ 妻: グンサ	不明 不明	父、祖父ともにグンサ
5	夫: グンサ 妻: グンサ	balbao 不明	
6	夫: オランチュン・ゴーラ 妻: 不明	不明 不明	
7	夫: 死亡 妻: グンサ	不明 不明	
8	夫: 死亡 妻: 不明	不明 不明	
9	夫: グンサ 妻: グンサ	不明 不明	父はグンサ、祖父はチベット
10	夫: 不明 妻: 不明	chamba balbao	
11	夫: グンサ 妻: グンサ	chamba mawa	
12	夫: グンサ 妻: グンサ	tsogodejumba chamba	父、祖父ともにグンサ
13	夫: 不明 妻: 不明	tsotsangenji nawa	
14	夫: グンサ 妻: グンサ	chorzomba kandhakshala	父はオランチュン・ゴーラ 生まれ
15	夫: グンサ 妻: オランチュン・ゴーラ	tsogodejumba 不明	12の息子
16	夫: オランチュン・ゴーラ 妻: グンサ	chorzomba kiipo	14の母
17	夫: グンサ 妻: グンサ	thaktokpa phukuta	
18	夫: グンサ 妻: チベット	balbao チベット人	
19	夫: チベット 妻: グンサ	balbao kandhakshala	
	夫: グンサ 妻: グンサ	balbao nawa	19の息子夫婦
20	夫: 不明(死亡) 妻: グンサ	chamba salaka	
	夫: 不明(死亡) 妻: グンサ	pankalma chamba	20の娘(寡婦)
21	夫: グンサ 妻: グンサ	nawa nawakinakpa	父はグンサ 父はグンサ
22	夫: グンサ 妻: 不明	minyakpa (民族名: リンブー)	父、祖父ともにグンサ
23	夫: グンサ 妻: 不明	nawakinakpa nawa	
24	夫: グンサ	balbao	父、祖父ともにグンサ 18の父
25	夫: グンサ 妻: グンサ	minyakpa chorzomba	父、祖父ともにグンサ 14の娘
26	夫: グンサ 妻: カベリ・コーラ	balbao bujunga	父、祖父ともにグンサ
27	夫: グンサ 妻: フォレ	balbao チベット人	父、祖父ともにグンサ
28	夫: グンサ 妻: グンサ	balbao チベット人	父、祖父ともにグンサ
29	夫: グンサ 妻: タクラム(アルン川上流)	balbao 不明	父、祖父ともにグンサ 27の息子
30	夫: グンサ 妻: グンサ	kandhakshala nawa	父、祖父ともにグンサ
31	夫: グンサ 妻: ヤンポディン	lama pujunga	父、祖父ともにグンサ

たのではないだろうか?

名和(1997; 53)によれば、ネパールの多くの民族の間では、ヒンドゥー高カーストに対する否定的な見方とともに、「ボテ」「ボティア」という呼ばれ方を嫌う傾向がある。高カーストから差別されることへの反発が、チベット系民族への差別となって現われている可能性も否定できない。タムール川流域に住む人びとも、そのように呼ばれることを拒否する態度を明確に示している、と思われる。私は、スケタルからグンサ谷へ向う間に位置する諸集落において、住民のジャート名の聞き取りに努めた。そこでは、ライ、リンブー、

グルン、シェルパといった民族名およびブラーマン、チュットリーというカースト名を聞き取ることができたが、彼らは、必ずしも正確に自らの出自を辿ることが出来なくても、ネパール国内で名の通った民族またはカーストを名乗るケースがある、という印象が強かった。

私は、タムール川流域の高地住民がシェルパを名乗るようになった理由としては、フォレの難民キャンプに移住してきたチベット人との差異を強調しようとしたことと、「ボテ」「ボティア」という呼称への拒否が挙げられる、と考えている。

表4 カンパチェン、ロナークにおける夫婦の出生地とthar(クラン)名

家数	夫婦の出生地	thar名	備考
カンパチェン			
1	グンサ (独身)	不明	両親はグンサ 祖父はチベット
2	夫:グンサ 妻:グンサ	minyakda nawa	両親はグンサ、祖父はチベット
3	夫:グンサ 妻:グンサ	balbao nawa	
4	夫:グンサ 妻:フォレ	balbao チベット人	父はグンサ、祖父はチベット
5	夫:フォレ 妻:グンサ	チベット人 nawa	
6	夫:グンサ 妻:ヤンポディン	balbao 不明	父、祖父はグンサ
7	夫:チベット 妻:グンサ	チベット人 不明	両親はグンサ
8	夫:グンサ 妻:フォレ	lama チベット人	父はグンサ、祖父はチベット
ロナーク			
1	夫:ギャブラ 妻:ヤングマ	不明 不明	
2	夫:フォレ 妻:フォレ	chanba チベット人	
3	夫:グンサ 妻:ギャブラ	nawa 不明	

4 課題と展望

これまでの2度にわたるタムール川流域での現地調査を通じて、私は主としてタムール川高地住民の暮らしの概要と最近の変容を把握することができた。同時に、WWFおよびネパール政府によるカンチェンジュンガ地域の自然保全地域化と国立公園化の動きが、自然環境と住民生活にとって幾つかの問題点を孕んでいることも指摘された。本節では、今回の調査で析出した今後の研究課題を示したい。

まず、グンサ谷の自然保護地域化と国立公園化が地域の自然環境と住民生活に与える影響を具体的に追跡し、分析・考察する必要がある。例えば、外部者の入域による植生、地形の破壊、家畜(ヤク、ヒツジなど)の放牧による植生の変化、住民の生計活動の変化などについてである。

そのためには、複数年にまたがる継続的な調査と資料収集が不可欠であるが、これまでのように、現地調査を数年おきに行なう形式には限界があった。しかし、前述の通り1997年から「北大・ヒマラヤの村と自然を守る会」がカンチェンジュン

ガ地域の総合的な学術調査を開始した。これによって、ヒマラヤ地域の自然環境と住民生活の関わり合いの研究が、今後さらに進展することが期待される。

次に、グンサ村およびナムチェ村での知見から、私は「サハヨギ」と呼ばれる慣行に関する調査研究を今後の調査課題として取り上げたい。

それは、グンサ村のある家庭でタムール川下流域のダンクタ、ヒレ付近出身の10歳くらいの少年が家事労働に従事している例を観察したことが発端であった。カンパチェンでも同じ例が見られた。彼らは、経済的に余裕があり人手が足りない家庭に来て、食事を与えられながら働き、数年後に家の主人から若干の現金を受け取って村に戻っていく、とのことである。このような慣行は、ネパールでは一般に「サハヨギ」と呼ばれ、広く見られると言う。あるロッジでは、チベットから来た15歳の少女が働いていた。彼女は、ロッジの主人が所用でチベットを旅行した折に、両親から頼まれたので連れてこられた、という。グンサ村にいた間は無償で働くが、2、3年後には主人からいくらかの現金を受け取ってチベットに戻る、とのことである。この慣行は、少年たちを送り出す家庭にとっては「口減らし」として機能するとともに、日常的に多くの労働力を必要とする家庭にとっては、人手不足の解消につながる。中でも、家庭の主婦にとっては家事労働の負担が軽減されるため、必要不可欠な慣行と言えるかもしれない。私は、以前ナムチェ・バザールのロッジでも、ソル地方出身の10歳くらいの少年が家事労働に従事しているのを目撃したことがある。

これは、かつて日本の北東北地方で見られた「借り子」制度という、前借り年季契約の奉公人を雇う制度に類似している(船水、1981; 321など)。私は、この慣行をネパール・ヒマラヤの高地でしか確認していないが、もっと広い範囲に分布している可能性が高い、と思われる。今後はこの種の慣行を他の地域でも見出し、より詳しく調査研究を進めたい。

文献

- 1) 上田豊(1979)『残照のヤルン・カン』中央公論社。
- 2) Bista, D.B. (1967) People of Nepal. Rastra Pustak Bhandar, Kathmandu.

- 3) Brown, T. (1994) *Livelihood, Land and Local Institutions: A Report on the Findings of the WWF Feasibility Study for the Conservation of the Kanchenjunga Area*. WWF Nepal Program, Report Series, #4.
- 4) von Fürer-Haimendorf, C. (1975) *Himalayan Traders*. John Murray, London.
- 5) 船水清 (1981) 『わがふるさと (五) 西津軽郡編』北方新社.
- 6) Gurung, D. (1996) *Eco-Tourism Development in the Kanchenjunga Region*. WWF Nepal Program, Report Series, #27.
- 7) 今井一郎 (1990) 「赤石川と生きた人びと—青森県・鱒ヶ沢町・旧赤石村—」『白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究』掛谷誠編: 169-190. 平成元年度科研費報告書.
- 8) — (1993) 「『世界の遺産』地域の自然と人—ネパール・クンブと白神山地の暮らし—」『ヒマラヤ学誌』第4号: 94-102. 京都大学ヒマラヤ研究会.
- 9) — (1996) 「『タムール・シェルパ』との出会い: 東部ネパール・タムール川流域の調査より」『ヒマラヤ学誌』第6号: 73-84. 京都大学ヒマラヤ研究会.
- 10) — (1999) 「東ネパール・タムール川流域訪問記」『京都大学学士山岳会ニュース・レター』No.12. 京都大学学士山岳会.
- 11) 名和克郎 (1997) 「カーストと民族の間—民族・ジャーナリスト・国家—」『ネパール』石井博編: 46-54. 河出書房新社.
- 12) 月原敏博 (1990) 「観光・交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノートから」『ヒマラヤ学誌』第1号: 85-112. 京都大学ヒマラヤ研究会.
- 13) Uprety, L.P. (1994) *Social, Cultural, and Economic Conditions of the Proposed Kanchenjunga Conservation Area*. WWF Nepal Program, Report Series, #5.
- 14) 渡辺悌二編 (1998) 『1997年カンチェンジュンガ調査報告書』北大・ヒマラヤの村と自然を守る会.
- 15) 渡辺悌二 (1998) 「調査地域の概観および調査の背景」『1997年カンチェンジュンガ調査報告書』渡辺悌二編: 1-4. 北大・ヒマラヤの村と自然を守る会.
- 16) 渡辺悌二編 (1999) 『1998年カンチェンジュンガ調査報告書』北大・ヒマラヤの村と自然を守る会.
- 17) 依田明美・池田菜穂・渡辺悌二 (1999) 「1997年から1998年にかけてのトレッカー受け入れ体制と宿泊施設数の変化」『1998年カンチェンジュンガ調査報告書』渡辺悌二編: 15-19. 北大・ヒマラヤの村と自然を守る会.